

P03a 大マゼラン星雲中の星形成領域 Henize 206 の近赤外線観測

金安渚(明星大学)、中島康、田村元秀(国立天文台)、加藤大輔(名古屋大学)、他 SIRIUS/IRSF チーム

Henize 206 は、大マゼラン星雲にある大質量星形成領域である。比較的近傍 (50kpc) に位置するため、構造の詳細を広い波長域で観測することができる。また、大マゼラン星雲は銀河系よりも低い金属量を持つので、銀河系内の同規模の星形成領域 (例えば、オリオン領域) との比較も興味深い。この領域では、シェルと呼ばれるガスや塵が超新星爆発や OB アソシエーションの恒星風によって圧縮され、「弧」のようになった状態が認められる。ガスや塵が圧縮されたシェル構造の部分では、何千もの星々が誕生している。このような、星の終焉と誕生のサイクルは銀河の星雲内での星々の誕生を理解する手掛かりとなる。

私たちは、南アフリカにある SIRIUS/IRSF によって得られたこの領域の近赤外線画像 (J、H、Ks) を解析した。本講演では、可視光、近赤外、中間・遠赤外など広い波長域にわたる比較から得られた、Henize 206 における星形成の描像をまとめる。